

詩篇119篇57～64節

- 57 主は私の受ける分です。私は、あなたのことばを守ると申しました。
 58 私は心を尽くして、あなたに請い求めます。どうか、みことばのとおりに、私をあわれんでください。
 59 私は、自分の道を顧みて、あなたのさとのほうへ私の足を向けました。
 60 私は急いで、ためらわずに、あなたの仰せを守りました。
 61 悪者の綱が私に巻き付きましたが、私は、あなたのみおしえを忘れませんでした。
 62 真夜中に、私は起きて、あなたの正しいさばきについて感謝します。
 63 私は、あなたを恐れるすべての者と、あなたの戒めを守る者とのともがらです。
 64 主よ。地はあなたの恵みに満ちています。あなたのおきてを私に教えてください。

חֲלֹקִי יְהוָה אֶמְרָתִי לִשְׁמֹר דְּבָרֶיךָ׃
 חֲלִיתִי פָּנֶיךָ בְּכֹל- לֵב חֲנּוּנִי כְּאֶמְרָתֶךָ׃
 חֲשַׁבְתִּי דַרְכֵי וְאֲשִׁיבָה רַגְלִי אֶל-עַדְתֶּיךָ׃
 חֲשָׁתִּי וְלֹא הִתְמַהֵמְהֵתִי לִשְׁמֹר מִצְוֹתֶיךָ׃
 חֲבָלֵי רִשְׁעִים עֲוֹנָי תִּתְּרֶנּוּ לֹא שִׁכַּחְתִּי׃
 חֲצֹת-לַיְלָה אָקוּם לְהוֹדוֹת לָךְ עַל מִשְׁפָּטֶיךָ׃
 חֲבַר אֲנִי לְכֹל- אֲשֶׁר יִרְאוּךָ וְלִשְׁמֹרֵי פִקּוּדֶיךָ׃
 חֲסִדֶּךָ יְהוָה מְלֵאָה הָאָרֶץ חֲקִיךָ לְמַדְנִי׃

第八字「ヘース」。発音的には「k」と「h」の間くらいで、痰を吐くような強い子音です。各節の冒頭に出てくる語を調べてみますと、以下のような意味の言葉が使われていることが分かります。

חֲלֹק / ヘーレク…分け前、割当て、部分、領土

חֲלָה / ハーラー…弱くなる、病気になる、悲しむ、淋しくなる、懇願する、祈る、請う

חָשַׁב / ハーシャヴ…考える、計画立てる、計算する

חָוֵשׁ / フーシュ…急がせる

חֲבָל / ヘーベル…綱、ロープ、領域、帯、会社

חֲצוֹת / ハーツォート…真ん中の、半分、分割

חֲבַר / ハーヴェール…ともがら、仲間、礼拝者

חֲסִד / ヘセド…優しさ、親切さ、誠実

57 節に「主は私の受ける分」という、日本語では少々理解しにくい表現が出てきます。おそらくここでイメージされているのは、過去にカナンの地の分割がなされたときにイスラエル十二部族に割り当てられた土地のことでしょう。各部族に土地が割り当てられましたが、なぜかレビ族だけには与えられなかったのです。

レビ人の祭司たち、レビ部族全部は、イスラエルといっしょに、相続地の割り当てを受けてはならない。彼らは主への火によるささげ物を、自分への割り当て分として、食べていかなければならない。彼らは、その兄弟たちの部族の中で相続地を持ってはならない。主が約束されたとおりに、主ご自身が、彼らの相続地である。(申命18:1-2)

ここでは、レビ族にとって「主ご自身が彼らの相続地」だと言われています。このことの意味するところは、レビ族とは祭司を輩出する部族でありましたから、特別に主に仕える「選ばれた部族」として、肉体労働に従事するのではなく、日々御言葉を学び、説き明かし、民のために祈り、とりなす努めが与えられたということです。土地を持たないということは、民族間において放浪者のような立場であり、一見何の保障もない不安定な生き方に見えますが、そうではなく、民全体が主にささげた献げ物の中から彼らの必要が満たされていくという比類なき特権にあずかる約束だったのです。レビ族は、他の部族にはできない働きを担い、日々最も主に近く歩む恵みが与えられました。

この詩篇作者がレビ族に属する人だったのかどうかは分かりませんが、そのような前提に立って今日の箇所を読んでみると見えてくることがあります。主に直接仕える者のあり方が深く教えられているのです。

「あなたに請い求めます」(58 節) とは、直訳すると「あなたの顔を甘美にする」であり、神の怒りをなだめる祈りをささげようとしている姿が浮かんできます。祭司であったモーセの祈りを見てみましょう。

しかしモーセは、彼の神、主に嘆願して言った。「主よ。あなたが偉大な力と力強い御手をもって、エジプトの地から連れ出されたご自分の民に向かって、どうして、あなたは御怒りを燃やされるのですか。」(出 32:11)

「みことばのとおりに、私をあわれんでください」(58 節)。詩人はあくまでもへりくだって、神と人との間に立とうとしています。

「私は、自分の道を顧みて、あなたのさとしのほうへ私の足を向けました」(59 節)。民のために祈る者は、まず自分の道を省み、自分の心の向かう方向が「主のさとし」であることを確認しなくてはなりません。

「私は急いで、ためらわずに、あなたの仰せを守りました」(60 節)。御言葉によって自分がどこへ進むべきかが示されても、なかなか行動に移せないのが人間というもの。しかし、彼は率先してそれを行ない、民に模範を示しました。

「悪者の綱が私に巻き付きましたが、私は、あなたのみおしえを忘れませんでした」(61 節)。自分に対する悪人の計略が見えてくるとき、それに対して怒りを燃やしたくなるものですが、彼はむしろ主に信頼する方を探りました。悪を打ち負かしてくださるのは主であることを信じたのです。

「真夜中に、私は起きて、あなたの正しいさばきについて感謝します」(62 節)。彼は夜中にふと目が覚めて祈りをささげることがあったのでしょう。不正の餌食になっている者のために主が公平な裁判を行なってくださることを願い祈ったのです。寝ても覚めてもとりなす詩人の姿がここにあります。

「私は、あなたを恐れるすべての者と、あなたの戒めを守る者とのともがらです」(63 節)。詩人は、神と自分との関係に終始するのではなく、民と共にあって主に向き合うことを常に心に刻んでいました。

「主よ。地はあなたの恵みに満ちています。あなたのおきてを私に教えてください」(64 節)。信仰共同体だけではありません。この世界全体のとりなし手として立って行けるよう、「主のおきて」を学び続けたのです。

直接献身の道が他の職業と比べて特別にハードであるということではなく（それぞれの職業に異なる大変さがあります）、しかし最も主に近く生きる幸いが教えられている箇所でありましょう。神と民に仕える人生の喜びを、彼は日々噛み締めていたのです。私たちがまた、どのような人生を歩んでいたとしても、人をとりなす祭司となることができるのです。